

## 第五章：孔子の政治・経済思想

南山有杞北山有李	南山に <sup>ひいらぎ</sup> 杞あり北山に <sup>すきも</sup> 李あり
樂只君子民之父母	樂只の君子は民の父母
樂只君子德音不已	樂只の君子は德音 <sup>とくいん</sup> 已まず

（「詩經」・小雅の南山有台）

孔子が理想として掲げた政治思想をひとことでいえば「徳治主義」又は「仁政」という言葉で表現されます。すなわち立派な仁徳を備えた統治者が「修己治人」、すなわち日々新たに自己を修養し、天下万民の安寧をはかることを唯一無二の信条として政府を組織化し、有徳・有能な人材を登用して政務を任せ、礼に則った秩序・法令を定めて自然と万民がそれに従うように教導することが政治の要諦だと考えました。伝説的聖天子である三皇や堯・舜が究極的に理想とされる統治者像で、既に第一章「唐・虞の時代」等で述べた通りです。

子曰わく、無為にいて治まる者は其れ舜なるか。それ何をか為さんや。己を<sup>うやうや</sup>恭しくして正しく<sup>なんめん</sup>南面するのみ。（衛霊公第十五の五）

（先生が言われるには、「賢人を選んで彼らに任せて、無為（よけいなことはしない）にして国を治められたのは舜くらいなもんだ。一体、何をされたろうか。ただ御身をつつしんで南面（政治をとる位置に座すこと）していただけた、と）

子曰わく、政を為すに徳を以てすれば、譬え<sup>たと</sup>ば北辰の其の所に居て衆星のこれに<sup>むか</sup>共うがごとし。（為政第二の一）

（先生が言われるには、「政治をやるのに徳を以て行えば、ちょうど北極星が自分の場所において、多くの星がその方向に向かってそれを仰ぎ見ているようなものだ、と）

ところで、「礼記」（礼運篇）に孔子の「大同・小康」という政治思想が載っています。ここで孔子は、三皇から堯・舜までを「大同の世」と呼び治世の極致とし、人間の狡知・私欲が発達した世になってからの禹・湯から文王・武王・周公までを「小康の世」と呼んで治世の模範としました。以下に「大同・小康」を説明した部分を引用してみます。

<孔子が言うには、「大道の行われていた古代や、夏・殷・周三代の最も良かった時期を私は見たわけではないが、記録などによるとこうだ。大道が行われた世は、天下は万民のものとされ、賢人・賢能を選挙して役職を与えて相互の信頼親睦を深めさせた。従って人々は自分の親や子だけを親愛することなく、老人は皆な安楽に身を終えさせ、働き盛りの者には十分仕事をやらせ、幼少の者は伸長すべく育成し、<sup>かんかこどく</sup>矜寡孤独廃失の気の毒な人々

は養い育み、男にはそれぞれに相応しい職業を持たせ、女は皆な相応しい相手に嫁がせた。財貨は貢ばれたが独り占めはせず、労力は他人のために使役することが重要視された。こういう心がけが行き渡っていたので、計略は用いられず、盗賊などの心配は無用なので、家の戸を鍵で閉める必要もなかった。これを『大同の世』という。

時代が降り、いつしか人々は天下を一家とみなすようになって、各々が自分の親を親とし子を子とした。財貨は私有され、貴人たちは世襲してそれを慣例となし、城郭や堀をめぐらして自己防衛した。そして礼儀の規範を定めて君臣を正し、父子の情を厚くし、兄弟を仲睦まじくさせ、夫婦を和合させ、制度や土地の区画を明確にし、勇や知を尊重して勲功を個人に帰した。これにより計略や戦争が起こった。禹や湯、文王・武王・周公などは計略や軍隊を用いて優れた業績を残したのである。この君子たちは、皆な礼儀を尊んだ人たちで、義や信といった徳を実践躬行し、敵の罪過を明らかにし、仁に則って謙譲の美德を顕し、万民に「人たる常道」を示したのである。もしこの常道に従わない者があれば、たとい権勢を誇るものでも万民に見捨てられ、人々からは災い視されてしまった。これを『小康の世』という」と。>

知・仁・勇を天下の達徳と言いますが、「大同の世」は「韓非子」(五蠹篇)が指摘するように、人口が少なく食物も豊富で人民が素朴であったことも考え合わせれば、為政者は仁者であればよかったが、「小康の世」に至っては、人民が狡知になり私欲が深くなったので、仁徳だけでなく知者や勇者であることが為政者として具備すべき必要条件に加わった、と「礼記」の礼運篇は言っているように読めます。結局のところ、現実の社会で「大同の世」の到来を夢見ることは理想に過ぎますが、「小康の世」の復古を願うことは可能であり、孔子の「徳治主義」「仁政」とは具体的には「小康の世」の実現を目指していると言っているでしょう。

さて、ドイツの社会学者マックスウェーバーが名著「職業としての政治」で縷々述べているように、政治の本質的な属性は広義における「権力」であり、政治は「倫理」「道徳」だけでは行えません。それを定公の時に大司寇まで上り詰め讒言にあって失脚した孔子は十分承知していたはずですが、政治は権力の悪魔と手を結ばなくては当人さえ無残に滅ぼされる結果さえ免れないのです。しかしそうであるにしても、ウェーバーも言うように、為政者が道徳的に挫けない信念を貫き通す覚悟が無ければ万民を博く施して救済する世を招来することはできません。

統治者である君主に、政治がかくも難しいことを自覚しその上で倫理的な善事をやっているのける覚悟があるか。「徳治主義」「仁政」を行って「小康の世」の復古を願う孔子は、為政者側の「万民の父母たる責任感や役割意識の深さの自覚」を第一に訴求し続けました。執政の座にあった時の定公との問答が「子路篇」にあります。

定公「ひとことで、国を盛んにし得る言葉はありますか」

孔子「近い言葉ならございます。だれかの言葉に『君主となることは難しく、臣下となるのも易しいことではない』とあります。もし殿様が、立派な君主となるのは至難なことだと認識されたら、この一言で国を盛んにするというのに近いといえるでしょう」

定公「それでは、ひとことで、国を危うくさせる言葉はありますか」

孔子「近い言葉ならございます。だれかの言葉に『わしは君主であることを別に楽しいことだとは思わぬが、ただ、何を言ってもわしに反対する者のないのは愉快なことだと思っている』とあります。これなどは一言で国を危うくするに近い言葉ではございませんまいか」 (子路第十三の十五)

孔子は定公に、国君たることの難しさを強く意識している君主こそが立派な政治を行うことができる、家臣等から阿諛迎合<sup>あゆげいごう</sup>されることを好む君主では早晚国を傾けてしまうと、答えています。「楽只<sup>らくし</sup>(徳豊か)の君子は民の父母」であることを自覚し、修己して百姓<sup>ひやくせい</sup>を安んずることが如何に至難な業であるかを肝に銘じるか否か、それが立派な君主となるかどうかの分かれ目だということです。愚君であった斉の景公や衛の靈公のことが脳裏を掠めたのでしょう。為政者としての強い責任感や役割意識が彼らに湯王<sup>とうおう</sup>の盤銘の「日新」を促し、大舜の「(善惡の)両端を執ってその中を民に用いる」賢明さに繋がるからです。すなわち孔子は何よりも先ず、「為政者自身が自らの姿勢を正すことこそが政治の要諦である」と定理づけます。

季康子が政治について孔子に訊ねた。孔子が答えて言うには、「政とは正です。あなたが率先して正しくされるなら、一体誰が不正でいられましょうぞ」と。(顔淵第十二の十七)

季康子が盗賊のことを憂えて孔子に訊ねた。孔子が答えて言うには、「もしあなた自身が無欲なら、たとえ表彰したとしても(人は)盗みをしません」と。(顔淵第十二の十八)

季康子は魯の大夫で、「三桓」一族である季孫氏の第七代目当主。定公亡き後の哀公時代の宰相を務め、子路・子貢・冉有等孔子の門弟を多く任用しました。どうしたら人民が敬虔忠実になって仕事にはげむようになるか、法を守らぬ者は処刑し道德者に見習うようにしたらどうだろうかなどしきりに孔子に訊ねています。孔子の答えは決まって「あなたが正しくあることです」「あなたが無欲であることです」「あなたが善を欲することです」と季康子自身の姿勢や態度を責めました。「顔淵篇」に季康子が政治について訊ねた時の明快な次の言葉は、現代の我々も拳拳服膺<sup>けんけんふくよう</sup>(胸に銘記して忘れず守ること)すべき名言だと思います。

（子曰わく）「あなた（季康子）が善を欲すれば、人民も善に赴くでしょう。なぜなら、君子の徳は風です。小人の徳は草です。草は風が吹く方向に必ず靡くものですから」と。  
（顔淵第十二の十九）

「四書」の一である「大学」に、「一家仁なれば一国仁に興り、一家讓なれば一国讓に興り、君主一人貪欲であれば一国乱をなす」「堯・舜は天下を率いるに仁を以てし民はこれに従い、桀・紂は天下を率いるに暴を以てし民これに従えり」とあります。まさに上に立つ者の一言が大事を覆し、上に立つ者一人の姿勢次第で国家が定まります。政治の興廃は上に立つ為政者次第、という考えは「論語」全編を一貫した思想で、前例以外にも至るところで見出すことができます。ここでは「子路篇」の次の二章を加えるだけで十分でしょう。

（子曰わく）「上が礼を好めば人民は尊敬するし、上が義を好めば人民は服従するし、上が信を好めば人民はまごころを働かせる。そのようであれば、四方から自分の子供をおぶってでも人々は集まってくるものだ」と。（子路第十三の五）

子曰わく、其の身正しければ、（命）令せざれども行わる。其の身正しからざれば、令すと雖ども従わず。（子路第十三の六）

「為政者自身が自らの姿勢を正すことこそが政治の要諦である」という定理には、当然のことながら、礼・義・信といった為政者自身の道徳的正しさを、口先でなく、人民に実際の政治上の場で見せていく必要がある、という条件が含まれます。例えば晋の文公（重耳）は孔子に「<sup>いつわ</sup>譎りて正しからず」となじられましたが、名君であったことはその後の晋の発展をみれば明らかで、文公自身、国民の信望を獲得するまでには、<sup>こえん</sup>孤偃の諫言を容れながら大変な努力をしました。

文公は人民教化に力を注ぐに際して、先ず第一に周の襄王の地位を安定させて義を国民に示しました。義とは道理、人の行うべきすじみちのこと。そして原の戦いでは、城を囲んで三日で落とす約束を兵士に伝え、<sup>くだ</sup>降らなかったのに退却命令を出しました。敵城内に放っておいたスパイから、今にも城は陥落しそうだという知らせが入ると將軍たちは攻撃しましょうと言ったが、文公曰く、「信は国の宝なり。民の<sup>おお</sup>庇わるる所なり。原を得るも信を失はば、何を以てこれを庇わん。<sup>うしな</sup>亡<sup>ますます</sup>う所慈々多からん」といって約束通り引き上げました。直後に城は墮ちたのですが、かくして兵隊たちに信を示しました。又、大演習を通して彼らに礼を教え示し、目付け役制度を設けて官位を正しました。城濮の戦いで楚を破り、天下に覇者となったのは、文公自らが礼・義・信を人民に実践してみせた結果であったことは記憶すべきことでしょう。

すなわち「為政者自身が自らの姿勢を正す」という言葉の行く先には、為政者自身が道徳的姿勢を人民に示すことにより「名を正す」、すなわち後の人が「正名思想」と呼んだ孔

子哲学が、王侯・卿大夫そして官吏等の執政者たち、ひいては士庶民に至るまで定着し、人が人としての道を行う社会になることが囑望されています。「君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり」(顔淵篇)がその端的な姿です。政治とは整然とした社会秩序の整備であり、君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信といった五倫実現のための方策にほかならないからです。「子路篇」の子路と孔子の重要な問答を再度掲げます。

子路「衛の殿様が先生に政治をまかされたら、真っ先に何からやられますか」

孔子「先ず名を正す(名分を正す)ことからはじめよう。君主は君主らしく、臣下は臣下らしくする。父は父らしく、子は子らしく。今は全くそれが乱れているからね。」

子路「それは先生ちょっと迂遠に過ぎませんか。事は急を要する状況です。名分を正している余裕なぞないと思いますが」

孔子「お前は粗忽者だ。自分の知らないことには口出しするもんじゃない。

名分を正さないと、発令する政策そのものが曖昧で、道はずれたものになる。

筋の通らない政策は、執務実行する者たちを納得させられず実効があがらない。

実効があがらないと、秩序・情操を旨とする礼樂による文化が廃れてしまう。

礼樂が振興されない社会は、厳しさと暖かさを併せもった刑罰がなされない。

刑罰が妥当性を失えば、人民は不安で手足の置き場にも迷うようになる。

だからこそ、君子はまず名分を正し、それを言明し、言ったことを必ず実行する。

あやふやで無責任な言葉を吐くようでは、断じて君子とはいえない」(子路第十三の三)

ところで、孔子がいかに人倫を重視した理想主義者であったとはいえ、当時の政治に必要なのが富国策であり国防策であり、人民教化策であったことを無視したわけではありません。冉有を伴って衛を訪れた際の問答は富国の重視を語り、教育を推奨しています。孔子「実に人口が多いね」冉有「本当ですね。さらに何を加えますか」孔子「富裕にすることだ」冉有「富裕になったら、さらに何を加えますか」孔子「教育だ」と。(子路篇) 又曰わく、「善人が人民を七年も教育すれば、戦争にいかせることができる」と。(子路篇) ただ孔子の政治思想の強烈さは、富裕も強兵も「人の人たる条件を満たした上で」という条件付きの厳しさを蔵しているところにあります。

子貢「政治の要諦をお聞かせください」

孔子「食糧を十分にし、軍備を固め、人民に信頼(又は信義)の心をもたせることだ」

子貢「もし、やむを得ず三つのうちいずれかを捨てるとなると、どれを先にしますか」

孔子「軍備を捨てる」

子貢「では、食糧と信頼の心のうち、いずれかを捨てるとしたら、どれを先にしますか」

孔子「食糧を捨てる。昔より、人はいつかは死ぬと決まっている。『信』が無ければ人間

## でなくなる」( 顔淵第十二の七)

人間の条件、それは、秩序が保たれた社会のなかで、それぞれがその位に素して信義又は信頼しあって正しく生きていくことだ、そしてそうあるべく統治し教導するのが為政者の責務である、人間から信頼という文字を捨てたら禽獣の社会に等しい、と。「信」は「死」以上に重要な人間の存在価値を保証しているのだ、と。「古より皆な死あり、民は信なくんば立たず」は、実に迫力を以て我々に迫ってくる言葉です。

余談ながら、現代にも孔子に負けない強い政治理念を持って民主主義獲得の道を訴え続けている政治家がいます。アウンサン・スーチー女史です。スーチー女史は周知のとおり、ノーベル平和賞を受賞されたミャンマー民主化運動の指導者として知られる政治家です。ガンジーの非暴力主義思想を受け継ぎ、「ミャンマー独立の父」と称され国民に慕われた父親アウンサンの遺志を實踐する国民民主連盟（NLD）の総書記でもあります。何度も軍党政権に対する「権力への反抗」を野外集会で行い、積極的な遊説活動を展開して度々自宅軟禁されました。現在は自宅軟禁からやっと解放された状態にあります。彼女は演説を通して、民主主義を勝ち取るためには為政者は勿論のこと国民の高い見識が欠かせない、と真摯で情熱的かつ格調高い言葉で迫ります。

＜人は全て死にます。死を恐れるということは、自然なことです。しかし考えてみると、いつか人は皆死にます。死にたくないといってもどうしようもありません。ですから生きている間に多くの人々のために行動したとするならば、死んでも死に甲斐があります。（中略）だからこそ、私達は全て、死ぬ前に、後世の人々のためになることを考えなければなりません。（現状を）修復していくといっても、急にできるものではありません。まず、そこなわれた品行から正していかなければなりません＞「アウンサン・スーチー演説集」（みすず書房版）

「死に甲斐＝生き甲斐」、「人々のために働く」、「品行から正す」。女史は演説で繰り返し繰り返しこれらの言葉を使い、皆が道徳的にレベルの高い国民になって、「良き指導者を選び、本当に良き指導者であるかをチェックし、彼が変節したらすみやかに解任する」ことが国民の責任だと訴えます。そして、特にリーダーたる「ルージー（為政者）」に対しては「論語」でいうところの聖人君子たれと絶叫しています。先の「顔淵篇」の言葉と併せて現代の我々が原点回帰してみるべき重要なテーマではないでしょうか。

さて話を「論語」に戻して、今まで述べた孔子の政治思想を端的にまとめるならば、孔子は政治そのものよりも、その政治を執り行う為政者の理念や品位の正しさそして強いコミットメントを、法律や礼式そのものよりも、それを執り行う者の正しい精神や実践性を重んじていたことが理解されたと思います。「君は民の父母」、西洋流に言えば「ノーブレ

ス・オブリージ（高貴な者には責任が伴う）」の自覚と実践です。

「君を弑する者三十六、国を滅ぼす者五十二」と「史記」（大史公自序）に記された下克上が社会風潮となり、「世衰え、道微にして、邪説暴行がおこり、臣にしてその君を弑する者、子にしてその父を弑する者これあり」と「孟子」（滕文公）が嘆く、「五倫」の乱れた春秋時代。本来あるべき人倫を回復し、社会秩序を維持して太平の世を築く責任は、現代以上に為政者の姿勢に関わっていたのです。勿論それは今も変わらぬ普遍原理ですが。

それでは次に、政治を具体的に執行するに当たっての要諦は何か、という孔子の実践思想に研究の焦点を移していきます。まずは学而篇にある次の言葉を柱にして考察をはじめてみましょう。

**子曰わく、千乗の国を導くに、事を敬して信、用を節して人を愛し、民を使うに時を以てす。（学而第一の五）**

「千乗の国を導くに」とは、「周王朝のさだめでは戦時に戦車千台を出すことのできる国、すなわち諸侯の国のこと。天子は万乗」（岩波文庫「論語」）のことで、「大国を治めるには」としておきましょう。

「事を敬して信」。事業を慎重にして信頼され」（金谷論語）「できるだけ事業をひかえめにして公約を守り」（宮崎論語）「政令を発布するには余程慎重で、発布した以上、かならず実行すること」（貝塚論語）「事柄を大切に信用を失うな」（吉川論語）等々学者によって多少ニュアンスの相違がありますが、「政府で行う事業や発令には敬を以て行い、庶民に信を得ることが大切だ」と言っているのだと思います。

「敬」は慎む・うやまう・まごころを籠める、転じて慎重に執り行ふの意。第一章の堯・舜の項で既に述べたように、もともと古代中国には「易姓革命」という政治思想があって、為政者は天の代理人として人民を統治する使命が与えられていると考えられていました。天子はもとより諸侯や国家老・陪臣もこの考えを以てすれば、国土や庶民の私物化は言語道断の所業で、何事も万民のための事業・法令を作興すべき責任感や役割意識に徹した慎重な行動が要求されるはずで、そうすれば人民の信頼を得る。「事を敬して信」ならざれば天の鉄槌を受けて没落・左遷されるのが当然の帰結と覚悟して政治に当たれ、と。

「用を節して人を愛す」。そのまま直訳すれば、「不要な費用を節約して人々を愛す」となります。これは「入るを量りて出るを制す」という財用の原理に則り政府の歳入歳出を按配し、「人を愛す」すなわち人民に過酷な賦役を強いるな、ということだろうと思います。

礼記（王制篇）に、「一国の宰相たる者が国用を制するには、必ず年末に於いてする。その年に納められた五穀が皆な蔵入りして、然る後に国用を制するのである。すなわち土地の大小や、その年の豊凶等の状況をみて、又、過去三十年間の平均値なども参考にして国

用を制する これを入るを量りて以て出すを為す、という」とあります。さらに「国に九年の蓄<sup>たくわえ</sup>無きを不足といい、六年の蓄無きを急<sup>いそ</sup>という。三年の蓄無きを、国その国に非ずという」とあって、旱魃水害に備えての備蓄のためにも「用を節する」必要があったのです。それをせず宮殿を飾り、奢侈に耽った君主が国を傾けた事例は枚挙に暇ありません。

ところで、米穀を蓄財する方法として礼記（王制篇）は、先の文章に続いて、「三年耕して、必ず一年の食有り。九年耕して、必ず三年の食有り。三十年の通を以てすれば、凶旱水溢<sup>すいいつ</sup>（凶年、旱魃、洪水）有りと雖も、民、菜色生無し（顔が青くならない）。然る後に天子食するに、日に挙ぐるに樂を以てす」と述べています。

この方法は「四分法」などとも呼ばれ、現代の個人の貯蓄法にも参考になる有益な仕法です。今仮に年間収穫量を過去のデータから平均したものを百の量とします。為政者はその四分の三を以て年間の費用と決め、残り四分の一を倉庫に備蓄します。これを三年繰り返すと備蓄が四分の三になり、一年の費用分にあたる米穀が蔵積みされる勘定になります。従って「三年耕して、必ず一年の食有り」ということになるのです。あとは比例計算をすれば明白な通り、九年頑張れば三年分、三十年継続すれば十年分の備蓄がなされるわけです。「用を節する」とは、孔子がどこまで財政政策を知悉していたかは別としても、過去の文献に伝わる、例えばこのような「四分法」なども含めて経済政策上の計画性・実践性を訴求しているものと考えてよいでしょう。

「民を使うに時を以てす」。賦税の大部分は農民が納める米粟です。未だ兵農分離されていない当時の社会で、農民が戦争や政府の土木事業等に駆り出されて、肝心な農繁期に時を失っては歳入に甚大な影響がでます。国政を司る者にとって、「入るを量る」ための最重要策は農時を奪わないようにすべきことであつたでしょう。司馬光の著した「資治通鑑<sup>しちちつがん</sup>」に次の話が載っています。

<かつて宋の衡陽王<sup>こうようおう</sup>が春月に狩をした。途中で老父が菅笠を被って耕しているのに出会った。王の左右の者たちがこれを退けようとした。すると老父が曰わく、「狩などをして遊び楽しむのは古人の戒めるところです。今、陽気まさに長ずる時節、一日耕さざれば我々農民は其の時を失ってしまいます。どうして禽獣などを追って楽しむ方々なぞの言うことに従って退いておられましょう」と。衡陽王、馬を止めて曰わく「賢者なり」と。臣下に命じてこれに食を賜わんとした。老父辞退して曰く、「大王さまが農耕の時を奪わざれば、則ち境内の民は皆、大王の食に食べ飽きることでしょう。私だけがどうして独り大王の賜物を受ける必要がありますでしょうか」と。衡陽王がその老人の名を問うたが、告げずして立ち去った。（「資治通鑑」・宋紀五）>

「民を使うに時を以てす」は、聖徳太子の「憲法十七条」の第十六条に取り入れられました。「十六に曰く、民を使うに時を以てするは、古の良典なり。故に冬の月に間<sup>いとま</sup>有れば、



以て民を使うべし。春より秋に至るまでは農桑の節なり。民を使うべからず。其れ農せずんば何を食らい、桑せずんば何をか服せん」と。

以上のことを今流に解釈すれば、施行する政令・法令は慎重に吟味して決して軽率にせず、国民に信頼される政府となり、歳入歳出を厳密にバランスさせ、国民に無益な増税を課すことなく、時宜に適った産業政策を以て国民の労働意欲を刺激して歳入増を図る。それが国政の要だ、と言っているのです。万古不易の名言と言えないでしょうか。

孔子が執政の座にあったのは、魯の定公の時ですが、諸国を十四年間も歴遊して魯に戻ってからは、哀公や宰相の季康子の政治顧問として時々参内していたようです。「春秋左氏伝」によれば、哀公は定公没後十歳前後で即位し、在位二七年に及んだ三桓の傀儡君主であった。末年三桓の専横を怒ってこれを滅ぼそうとして失敗し、邾から楚へと亡命し、国人によって楚から迎えられたが間もなく崩じました。「論語」に五度登場し、「中庸」他儒学関係の書物に孔子や弟子たちとの問答を色々残しております。特に次に掲げる哀公と弟子の有若の顔淵篇の一章は、間接的に孔子の経済思想を垣間見ることのできる貴重な問答です。

哀公「凶作で歳入が不足している。どうしたものだろうか」

有若「減税して一割の税率にされてはどうでしょう」

哀公「現在の二割でも私には不足しているのに、どうしてまた減税などするのか」

有若「万民が足りることが殿さまが足りるということで、万民が不足していたら殿さまは一体誰と足りるとされるのでしょうか」(顔淵第十二の九)

有若は有子と呼ばれ、孔子の教えを体得していた有能な弟子の一人です。「論語」で「何々子」と敬称されて記されているのは有子と曾子だけで、或はこの二人が「論語」編纂の責任者だったのではないと言われる聡明強識な人物だったようです。この有若が、哀公に減税策を提言している場面です。重税は「苛政(苛酷な政治)」で、寧ろ今より事態を悪化させるだけだ、と言っているのです。無論孔子の思想の伝道でしょう。「礼記」(檀弓上篇)や「孔子家語」(正論解篇)に次の話が載っています。

<孔子が斉に行き泰山の側を過ぎた。すると野で婦人が泣いているとても悲しい声が聞こえた。孔子は「この悲しみの声は、幾重にも苦難に逢った者のようだ」と言った。子貢をやって理由を問いかけてさせた。婦人が答えていうには、「かつて舅が虎にやられ、夫もやられ、そして今度子供がやられました」と。子貢「なんでこの危険な土地を去らないのですか」婦人「苛酷な政治がないからです」子貢が戻って孔子に伝えた。孔子曰く、諸君これを記憶しなさい。「苛政(苛酷な政治)は暴虎よりも猛なり」と>

過度の重税により庶民は塗炭の苦しみに喘ぎ、労働意欲を喪失し、庶民を国土から離農させ、他国へ流出させます。国庫は益々不足するのです。富国の条件は帰農する民が多く、諸国から百工が訪れて市場が活気を呈することです。減税はいつの世も経済活性化の原則の一つのようで、有若の献策は今日に通じるものがあると思います。

経済政策に関しては、減税以外にも「**恵みて費やさず**」という注目すべき考えが「堯曰編」に述べられています。孔子は弟子の子張がそれはどういう意味かと訊ねると、「**民の利とする所に因りてこれを利す。これまた恵みて費やさずにあらずや**」(堯曰第二十の四)と答えています。すなわち恩恵を庶民に施すのだが、政府が公的な金品を投じて福祉援助するのではなく、庶民が現在従事する農耕、魚塩、山林の業務をそのまま保護し助長する政策を導入すれば、彼らが利とすることを更に利することになり、自主独立して生活の向上を図ることができる、という考えです。

米沢藩の財政改革を見事に成し遂げた上杉鷹山公は、この「**恵みて費やさず**」を改革の理念に掲げて誓文に記し春日社に奉納しました。勸農政策として三ヵ年の租税免除をして離農防止を図ると同時に、貸付粃米や金銭を七年据え置き of 五十年割賦返済制度を導入したり、京都より染色工・織工を招き農民に桑・紅花・藍・漆等の付加価値農産物を栽培することを奨励したりしたのです。これがすなわち「**民の利とする所に因りてこれを利す**」というやりかたです。今日でいえば規制緩和策なども「**恵みて費やさず**」に当るでしょう。

ところで、有若が「**万民が足りることが殿さまが足りるということで、万民が不足していたら殿さまは一体誰と足りるとされるのでしょうか**」と言ったように、孔子は庶民一般の生活を厚くし豊かにすることが経済の目的だとして、富の偏重を嫌い、財の分配にも平均法的な考えを抱いていました。

私(孔子)は聞いている、「**国を保ち家を有つ者(大夫や家老)は土地や人口が少ないことを患えずして均しからざる(不公平又は不平均)を患え、貧しきを患えずして安からざる(不安)を患う**」と。すなわち公平ならば貧しくないし、仲良くすれば人口が少ないことはなく、平安ならば危険も少ない。(季子第十六の一)

この「**土地や人口が少ないことを患えずして均しからざる(不公平又は不平均)を患え**」という箇所は、富の分配の平均性が強調されています。貧富の差を防ぐための土地制度であった堯・舜以来の伝統的精神たる均田法の概念が投射されているのです。向こう三軒両隣が皆な同じなら不平がでない。「**貧富の差 = 不平均が、経済の不平等**」という考えが今日からみて妥当かどうかは別として、孔子が富める者が過度に収斂(租税を取り立てること)して貧富の差が益々拡大するのを極端に忌み嫌ったことは、彼の政治経済思想を知る上で

重要な位置を占めています。第四章でも引用した先進篇の文章を再度掲げておきます。

季氏、周公より富めり。而して求（冉有）やこれが為に収斂してこれを付益す。子曰わく、  
「（冉有は）吾が徒に非ざるなり。小子（諸君）鼓を鳴らしてこれを攻めて可なり。」（先進第十一の十七）

（先生が言われるには、「周王朝の大宰相であった周公より富んでいる季氏に、さらに足し前して富まそうとする冉有は、吾が徒に非ず。生徒でも仲間でもない。小子（後輩諸君）太鼓を叩いて彼を攻めてよいぞ」と）

孔子の経済に関する考えをもう一つ付け加えるならば、「利は義の和である」という思想です。「子曰わく、利に放りて行えば、怨み多し」（里仁篇）を敷衍して、後の者がそれを発展させた考えです。殊に孔子の道統の継承者を自認した孟子の言行録である「孟子」は、仁や義（人間のおこなうべきすじみち）を重視することが大局的にみたら利益につながるのだ、という思想を導くアプローチとして、冒頭を次の問答から語り始めます。

< 孟子が梁の恵王に面会した。王曰く、「先生は千里を遠しとせず我が国にこられた。他の方同様に我が国を利する方策をもってお見えになられたのでしょうか。孟子曰く、「王様よ、どうしてそうも利益、利益と申される。大切なのは仁義あるのみです。王がどうして我が国を利そうかといい、大夫はどうして我が家を利そうかといい、士庶民は士庶民でどうして我が身を利そうかといって、上下交々「利だ、利だ」といっていたら国家はまことに危うい。（中略）そのように義を後回しにして利益ばかりを追い求めていたら、結局皆が奪い合いをしあって乱れるばかりです」と>（梁恵王上）

「大学」には、「魯の賢大夫の孟献子がこう言っている。『乗馬用の馬を飼う身分にもなったら、鶏豚を飼って食用にしたり、それを売って庶民と利を争ったりはしない。祭礼用の氷室を使用できる身分ともなったら同様の理由で牛羊を飼わない。戦争になれば戦車百台を出す家柄になったら、領民から厳しく収斂する家臣はおかない。収斂の家臣がいるくらいなら寧ろ主家の財物を盗む家臣がいたほうがよい』と。国は利を以て利となさず、義を以て利となすというのはこのことだ」とあります。庶民の利を掠めては却ってツケが回って大きな不利益を被るのだ、と言っているのです。まさに「利は義の和である」。

経済思想はそのくらいにして、引き続き「論語」から具体的に政治を執行するに当たっての要諦を探っていくわけですが、孔子が度々論及するのが「救賢」すなわち優れた人材の拔擢・登用です。「中庸」に、魯の哀公が孔子に政治について訊ねると孔子は、「文王や武王の行った優れた政治については文献として書き残されています。問題はそれを執り行う人物がいるかどうかで、そういう人物がいれば政治の業績は上がり、然るべき人物がいなけ

れば政治は廃れてしまいます」と答え、「故に<sup>まつりごと</sup>政を為すは人に在り」と断言しています。

哀公が「どうしたら人民が服従するだろうか」と孔子に訊ねた。孔子が答えて言うには、正しい者を抜擢して、<sup>まが</sup>枉った者の上に据えれば人民は服従するでしょう。逆の場合は人民は服従いたしません」と。(為政第二の十九)

舜、天下を<sup>たち</sup>有ち、衆に選んで<sup>こうよう</sup>皋陶を挙げしかば、不仁者は遠ざかれり。<sup>とう</sup>湯、天下を有ち、衆に選んで<sup>いいん</sup>伊尹を挙げしかば、不仁者は遠ざかれり。(顔淵第十二の二十二)

名君として名高い唐の太宗・李世民が、太子李治(三代高宗)のために自ら書き記した「帝範」は、帝王学の書として「貞観政要」等とともに為政者に読まれた名著ですが、その中にも「それ国の<sup>きょうほ</sup>匡輔(補佐し正すこと)は、必ず忠良(なる人物)に待つ。任使(諸官の任命にあたっては)その人を得れば、天下自ずから治まる」と「求賢」の重要性が説かれています。以下、「帝範」(求賢篇)に曰く、

<有能な志士・賢者というものは、鳥がその翼をおさめ、龍が鱗を隠すように、その才能を潜めて時のくるのをじっと待っているものだ。それ故、名君は広く天下の英才を求め、微賤の中からも登用しようと心掛けるものだ。例えば、殷の名宰相であった伊尹は、もとは鼎や俎板を背負って歩くただの付き人だったが、湯王が抜擢して使用した。太公望呂尚は、渭水のほとりで釣りする貧しい老人だったのを文王が見出した。管仲は<sup>ろいせつ</sup>縲紲(獄に繋がれること)に苦しみ、韓信は逃亡に疲弊して汚名にまみれた人物であったが、管仲は斉の桓公を覇者に押し上げ、韓信は漢の高祖・劉邦の天下統一に最も武勲を立てた。まさに「帝王の国を治むるや、必ず匡弼(輔弼)の資(才能)に籍(借)る。故に(君主は)これを求めてここに労し(賢者を求めることに努め励み)、これに任ずれば則ち(安)逸す」>

「呂氏春秋」にこんな話が載っています。孔子の弟子の<sup>ふばき</sup>巫馬期和<sup>みくしせん</sup>宓子賤がそれぞれ魯の<sup>せふ</sup>單父という地方の長官となって政治を司ったことがありました。宓子賤は堯舜よろしく鳴琴を弾じて政堂から出たことがなく、それでいて單父はよく治まっていました。一方巫馬期の方は、暇さえあれば人民のためになることを自らせさせとやり、星とともに自宅を出て夜中の星空を見ながら帰宅するという熱心ぶりで、やはり單父はよく治まっていました。巫馬期が宓子賤に何もしないでよく治まった理由を訊ねると、宓子賤曰わく「私のやり方を『人に任ずる』といい、貴公のやり方を『力に任ずる』という。力に任ずる者は実に疲労し、人に任ずる者は実に安逸するものだ」と。(察賢篇)

「舜は五人、武王には十人の優れた臣下がいて天下が治まった」と泰伯篇にあります。そして「<sup>かた</sup>才難し(人材は得がたい)」とも。 それでは才能の優れた賢人をどういう風に

してその存在を知り抜擢すればよいのか。弟子の仲弓<sup>ちゆうきゆう</sup>が季氏の奉行となってそれを質問しました。すると孔子は、「役人のことを先にして、小さな過ちは大目にみて、賢才を挙げることだ」といい、さらに「爾<sup>なんじ</sup>の知る所を挙げよ。爾の知らざる所を、人これを舍<sup>す</sup>(捨)てんや」(子路篇)と答えました。すなわち先ず君が良いと思った人間を抜擢しなさい。そうしたら、君の知らない人間で賢才がいれば人々が捨てておかないだろう、と。

この言葉は「史記」・燕召公世家にある「まず隗<sup>かい</sup>より始めよ」の故事を連想させます。隗というのは戦国時代、燕国の昭王<sup>しふ</sup>の師傅<sup>しふ</sup>(教導主事)となった郭隗<sup>かくかい</sup>のことです。当時内憂外患のため壊滅状態に瀕していた燕を再建しようと考えた昭王が、人材を諸国から集めて国力の充実を図ろうとしました。それを郭隗に相談したところ、郭隗が言うには「先ず隗より始めよ」と。すなわち、私(郭隗)のようなさしたる才能もない者を優遇されよ、そうすれば私より優れた人材が続々集まってくるでしょう、と。昭王が言われた通り郭隗を師傅として優遇するや、魏からは名将楽毅<sup>がくき</sup>、斉からは学者の鄒衍<sup>そうえん</sup>、趙からは將軍劇辛<sup>げきしん</sup>といった錚々たる人物が群集しました。そして遂に宿敵斉を破って雪辱をはたしたのです。人材を抜擢するには、先ずは「小さな欠点に目くじら立てず、爾<sup>なんじ</sup>の知る所を挙げよ」。

ところで先に定公が、「ひとことで、国を危うくさせる言葉はありますか」と訊ねた時に孔子が「近い言葉ならございます。だれかの言葉に『わしは君主であることを別に楽しいことだとは思わぬが、ただ、何を言ってもわしに反対する者のないのは愉快なことだと思っている』とあります。これなどは一言で国を危うくするに近い言葉ではございますまいか」(子路篇)と答えた場面がありました。この「何を言ってもわしに反対する者のない」というのが人材抜擢上でネックとなる元凶です。

中国史上最も繁栄した「貞観の治」で有名な唐の太宗が、ある日「あの田舎爺を殺してやる」と言って腹を立てながら朝廷から帰ってきました。皇后が「そんなにお腹立ちなさってどうされたのです。相手は誰ですか」というと、太宗が言うには、「大臣の魏徵<sup>ぎ ちゆう</sup>の奴だ。事ある毎に閣議で私を諫めて恥をかかせおる」と。それを聞いた皇后は朝服に着替えて庭に立たれました。太宗が驚いてそのわけを問うと、皇后が言われるには、「私はこう聞いています。『主、明なれば臣、直なり』と。今、魏徵が直であるのは陛下が明であられるからです。どうしてこれが慶賀せずにおられましようか」と。太宗はそれを聞いて喜んだ、という話が「資治通鑑」(唐紀十)に載っています。太宗は房玄齡<sup>ぼうげんれい</sup>、杜如晦<sup>とじょかい</sup>そして魏徵等を得て、稀にみる太平の世を築きました。直言居士の意見を傾聴し彼等を抜擢したからこそ「求賢」の功があったのです。

著者の司馬光も「資治通鑑」(唐紀八)の論贊(史伝記述者の論評)で、古人の言葉に「君明らかなれば臣直し」とあるが、重臣の裴矩<sup>はいく</sup>は隋の煬帝<sup>ようだい</sup>の時は佞者<sup>ねいじゃ</sup>(おべっか使い)で、唐の太宗の時は忠言を吐いた。これは彼の性格が変化したわけではない。君主が自らの過ちを聞くのを悪むと、忠の心を持つ者も化して佞者となり、君主が直言を聞くのを楽しむと、佞者も化して忠の人になる。要するに君主次第で臣下は日時計の影のように移るもの

なのだ、と言っています。すなわち唐の太宗のように、先ずは上の者が好んで諫言を聞く耳を持つことが「直き（者）を挙げて任れる（者）に錯く」ための必要条件ではないでしょうか。

子路、君に事えんことを問う。子曰わく、欺くことなかれ。而してこれを犯せ。（憲問第十四の二十三）

（子路が主君に仕えることを訊ねた。先生が言われるには、「まごころを以て仕え、偽り欺いてはいけない。しかし主君が間違っていたら、逆らっても諫めよ」と）

忠言は逆耳（<sup>げきじ</sup> 耳に逆らう）。統治者が聞く耳を持ち、忠心から諫める臣下を抜擢・登用できる風土が政府やあらゆる組織体にあれば、古今の社会や国家の衰亡の大半は防ぐことができたでしょう。「故に<sup>まつりごと</sup> 政を為すは人に在り」の根幹は、いかに統治者と被統治者の双方に、「欺くことなかれ。而してこれを犯せ」を許容し実践する度量と勇気があるかに係っていると言っても過言ではありません。そしてそれが可能か否かは、君臣関係に関する根本的な考え方に起因します。次の問答は組織社会に住まう我々にも、改めて脚下照顧させる問題提起に思えます。

定公が訊ねた。「君主が臣下を使い、臣下が君主に仕えるにはどうしたらよいだろう」と。孔子が答えて言うには、「君主が臣下を使うには礼を以てし、臣下が君に仕えるには忠を以てす」と。（八佾第三の十九）

「君主は正しい礼を以て臣下を使い、臣下は忠（まごころ）を以て君主に仕える」というのが孔子の君臣関係の要諦で、先の「欺くことなかれ。而してこれを犯せ」という言葉と併せて考えると、孔子は、「政治を担当する総ての者は、秩序に沿って決められた位に素して、すなわち自分の役割を自覚して、それぞれがそれぞれの政務にあたれ。君は君として臣は臣として、上下・貴賤に奢ったり、阿ったり、僭上することなく、役割上での是々非々を貫き、目的である太平の世を築くべく結集・尽力せよ」、と言っているのだと思います。「三国志」時代の蜀の劉備と諸葛孔明の「水魚の交わり」がその好例です。

魏の祖・曹操や、群雄の一人袁紹等が多数の謀臣を抱えていたのに比べ、劉備は一騎当千の武者を抱えながら、有能な参謀に恵まれず苦杯を嘗めていました。そこに司馬徽や徐庶の推挙で巡りあったのが二十七歳の臥竜・諸葛孔明です。徐庶の進言通り劉備は自ら孔明の草廬に赴き、三度目にようやく会うことができました。かくも「三顧の礼」を尽くした劉備に孔明は感激し、「天下三分の計」を語り、劉備が後日蜀漢を確立する名参謀となったのはすでに読者の皆さん周知の事実です。その諸葛孔明が劉備没後、劉備の子劉禪に、魏を討つために出陣の際上奏した「出師の表」に曰く、

＜臣（孔明）は本、布衣（無位無冠の庶人）躬（みづか）ら南陽に耕す。苟（いやし）くも性命を乱世に全うし、聞達を諸侯に求めず（諸侯に知れることは願っていなかった）。先帝（劉備）、臣の卑鄙（ひるろう）（身分が低いこと）なるを以てせず、猥（みだ）りに自ら枉屈し（自ら身を屈して）、三たび臣を草廬（そうろう）の中に顧み、臣に諮（はか）るに当世の事を以てす（当世の情勢を訊かれた）。是れにより感激し、遂に先帝に許すに驅馳（くち）を以てす（劉備のために奔走することを承知した）。＞（「三国志」・蜀書）

「君、臣を使うに礼を以て」迎えられた諸葛孔明は、「臣、君に事うるに忠を以て」仕えました。それは後主・劉禅にも及びました。魏の曹休が呉と戦って敗れ、手薄になった関中を攻めんとして北伐する際に上奏したといわれる「後出師の表」の末尾に、「臣（私、孔明は）鞠躬（きくきゆう）尽力し（精一杯の努力をし）死して後已まん。成敗利鈍（せいばいりどん）に至りては、臣の明の能く逆覩（げきと）（予見）する所にあらざるなり」と書して、生命を賭して漢中から出陣していった孔明のありようは、まさに劉備が公明を使うには礼を以てし、公明が劉備に仕えるには忠を以てした好例といえます。

この章の最後に、孔子の政治思想を法律との関連で見てみることにいたしましょう。孔子は基本的には法律で人を裁くことを第二義のものと考えていました。だから、「私は訴訟を聞いて裁くことでは他人とそう変わらない。だが、訴訟そのものが起こらないようにすることに他人より熱心だ」（顔淵篇）と言っています。

この言葉は、「大学」にも全く同じ文章が載っていて、この後に続いて、「そのためには、為政者が徳を以て人民を感化し、悪いことをした者が真実を偽っていかにも上手に弁明してもむだだと悟らせ、悪事そのものを行うことを恥じ入るように教化するからである。これを本を知るといっているのである」と述べています。同じ趣旨の文章が「為政篇」にあります。

先生が言われるには、「人民を導くに当って、法令で固めた政治を主とし、刑罰で統制していくなら、法網をすり抜けてしまえばよしとして、恥を知って改心するということが無いが、道徳で導き、礼で統制していくなら、恥を知りかつ本心から改心させることができる」と。（為政第二の三）

老荘思想で知られる「老子」にも、「法令滋（ますますあきら）彰（あき）かにして盗賊多くあり」（下篇第五十七）とあります。確かに現代でも何か事件が起こったりすると、取り締まりが厳しくなり、付随した法令が次々生まれますが、法令は所詮人が作ったもので、どこか抜け道があるものです。悪い奴ほど知恵がまわります。法令・刑罰だけで統制しても、本心から改心させない限りいたちごっこを繰り返すだけになってしまう。

それを「道徳で導き、礼で統制していくなら、恥を知りかつ本心から改心させることができる」と孔子は言っています。これは単純にその通りです、とまるごと請合うことはで

きませんが、法令・刑罰以外で「人間の善意を高揚させる方法」を組み合わせ、恥を知る人間に善導していく必要があることは賛成できます。

「孟子曰わく、恥の人に於けるや大なり、と」(尽心篇上)。恥を知ることが人間と禽獣の違いです。「孟子」は人間には本来、仁義礼智という四徳の道に進む芽生え(端=糸口)を生まれながらに持っている、すなわち惻隱(あわれみ)の心は仁の芽生え、羞惡(不善をにくむこと)の心は義の芽生え、辞讓(譲り合い)の心は礼の芽生え、是非(良し悪しの弁別)の心は智の芽生えだと言って、性善説(四端説)を唱えました。

この「羞惡の心」が己の不善を恥じ惡む心で、これをキチンと育めば恥を知る人間になる。恥を知る人間は義憤することはあっても、所謂惡事はしないものです。するとこういうことをすると人として恥ずかしい、ということを大人自らが教え導いていかないといけない。では、親が不善者であった場合、どうなるのか。孔子伝の葉公のところで述べた正直者の「直窮」のことが俎上に上げられ、再吟味する必要があります。

葉公が孔子に語って言った。「私の党(邑)には直窮なる男がいて、その父親が羊を盗んだので、役人に知らせました。(私の邑では法令を守ることかくの如く徹底しています)」、と。孔子曰わく、「私の党(邑)の正直者とは、それと異なります。父は子の為に隠し、子は父の為に隠します。正直さは自然とその中にあります」、と。(子路第十三の十八)

「正直」とは葉公の言うような「法的な正直」「国家倫理」を是とするのか、それとも孔子の言う「親子間の情愛」「家族倫理」を是とするのか。こういう観点で「直窮」のこの問題については「呂氏春秋」(當務篇)などにも記載され古来色々論議されました。因みに手元にある幾つかの現代の「論語」解説書から、この章に関する考えを二、三拾ってみると次のようになります。

1. 「そのままでは正直といえないが、正直の意義は、このうちに存している」と訳し、「余説」に「孟子」を引用した後、天子となって政治をする人は他にもあろうが、父と子の代役を果たすことのできる者は誰もいない。父子の間は絶対である。この真理を無視しては、倫理道徳はなりたたないところに儒家の学説の根本がある。(吉田論語)

2. 春秋末期は社会の治安が悪く、盗賊が横行していた。それだからこそ葉公は、父の窃盗罪を訴え出た息子のことを得々として自慢した。(中略)家族思想の基礎の上に国家の治安が維持されるのを当然とする孔子はこれに反対した。(貝塚論語)

3. 国家共同の利益を重んずべきか、家庭内の愛情を、より重んずべきかは、中国でも古くから論争のあるところであるが、前者の立場に立つのが法家であり、後者の立場に立つのが儒家である。中国の後代の法律は、儒家の立場を取り入れ、近親の間の罪状湮滅は罪



にはならない。(吉川論語)

さてここで考察すべきことは、孔子が法令で人を改心させるより「恥を知る」ことを徳によって善導することの重要性を述べているのに、親が不善者であった場合、どうなるのか、という問題です。私は「直窮」の「正しさ」を法家と儒家の立場云々などでこの章をあいまいに解釈してはならない、実はこの「直窮」の章にこそ孔子の政治思想が婉曲的に述べられているのではないかと考えるものです。

後述するように孔子は「論語」で、「父が死んでから三年間は、父のやりかたを変えないのを孝という」(里仁篇)とか、「孝行や悌順は仁の本だ」(学而篇)とか、「孝の根本は敬だ」(為政篇)などと言っていますが、「父母に仕えて悪いところがあったら穏やかに諫めよ」(里仁篇)とも言っており、悪や不善を見て見ぬ振りをせよ、とは一言も言ってはいません。もし子供に「父が他人の羊を盗んでもそれを他人に隠せ」と教えたとすれば、「恥を知れ」という孔子の倫理思想は無きに等しくなってしまいます。

儒家が尊ぶ「孝経」に「諫諍の章」というのがあって、「天子や諸侯に道ならぬ行為があった場合、諫め争う家臣がいたら、天下・国家を失うことはない」「父に不義があって子が諫めるなら、父は不義に陥らなくてすむ」と君臣・親子であっても不義を行えば諫争せよ、と教えています。しかし又、父の不義を見たら役人に訴え出よとも言ってはいません。

結論を言えば、孔子は「父親が羊を盗んだことは恥すべき行為である。しかし直窮が諫争するのは是としても、親子の情愛を思えば、おいそれと自分の父親を役人に突き出すのもどうかと思われる。どんな事情でそうなったかを詳らかにし、父親が父親らしく不善を行わず、子は子としての敬愛を親に注ぐ<sup>むら</sup>邑になるような徳治政治を目指すべきで、法律を守ることが徹底されたということだけを尊重して、それを得々と自慢するあなたはおかしい」と、「私の党(邑)の正直者とは、それと異なります。父は子の為に隠し、子は父の為に隠します。正直さは自然とその中にあります」とわざわざ親子の情愛面の重要さを浮き出させて葉公にクギをさしたのではないかと。「人を見て法を説く」のは孔子のよく使う手だからです。

すなわち、葉公が重要視する法治主義への偏重を衝いた言葉で、「直窮という男が、父親の罪を罪として告発する前に抱くべき人間の性、すなわち子が親の罪を隠そうとする本然の性をも鑑みて、“告発した正直”だけを一方的に賞賛することが妥当かどうかを考えられるべきだ」と言っているように聞こえます。

孔子は基本的には人倫思想が君主から遍く家庭にまで行き渡る政治を理想とし、法律で人を裁くことを第二義のものと考えていたからです。当時の孔子には、儒家対法家などという難しい概念は脳中に無く、ただ、君臣に礼や義があり、夫婦が和合し、親子が親しみ、兄弟が仲睦まじく、老人や目上の人を大切にし、近隣同士が助けあい、朋友に信がある世の中の実現を夢見ていたのだと考えていいのではないのでしょうか。